

# Pascal : 《Pensées》の二つの写本について

à feu Monsieur Louis Lafuma

広田昌義

1938年、Z. Tourneur が、《もし私がそう信ずるように、1ère Copie の再現している断章配列が、Pascal 自身の手になるものだとするならば、その配列は比較を絶した価値を有することになる》<sup>(1)</sup>と述べて、1ère Copie (第一写本) の断章配列にほぼそった《Pensées》、Cluny 版二冊<sup>(2)</sup>を世に出してから、P. L. Couchoud<sup>(3)</sup>、とくに L. Lafuma の綿密かつ精力的な研究<sup>(4)</sup>によって、現在バリのフランス国立図書館所蔵の、Pascal: Pensées の写本、Manuscrit B. N. fonds français 9203 (これが普通便宜上 1ère Copie あるいは第一写本と呼ばれているものである) を無視して、《Pensées》を語ることは不可能と考えられるようになった。

Pascal の死後、彼の部屋で《全て一緒にいくつもの綴り(liasses)にとじられて<sup>(5)</sup>》発見された紙片——その上に Pascal の《Pensées》の諸断章が書きつけられていた——は、現在大型のノートに貼りつけられ、このノートは《ORIGINAL DES PENSEES DE PASCAL》と題されて 1ère Copie と同じくバリの国立図書館に保存されている。これが通常 Recueil Original と呼ばれているものである。Z. Tourneur の先駆的な研究を引きついで、L. Lafuma は、第二次大戦後、1ère Copie と Recueil Original の照合作業を行ない、その結果次のような結論に達した。

すなわち、現在は Recueil Original に、

まったく何の秩序もなく貼りつけられてある紙片の一部分は、それが発見された時には分類整理されており、Pascal が生前その執筆に専心していた《キリスト教弁証論》の大よその骨組を構成していた、そしてその骨組を 1ère Copie が再現しているというのである。<sup>(6)</sup> これは、すでに Z. Tourneur によってなされた主張であったが、L. Lafuma の功績は、この主張の物的証拠を豊富に提出したことにある。ここで Lafuma の所説に従いながら、Recueil Original と 1ère Copie が何をわれわれに明らかにしてくれるかを見ることにしよう。

**Recueil Original** Léon Brunschvicg は 1905年に Recueil Original の photo-copie を出版した。<sup>(7)</sup> これによって Pascal の Manuscrits の状態を瞥見することができる。

まず貼りつけられてある紙片の順序であるが、全体を通しての意図的秩序は見出せない。

次にその紙片の形態であるが、これはいくつかの興味ある事実を示している。

紙片の形態と書きつけられてある断章とを関連させて考えると、Recueil Original の紙片は、次の四種類に大別できる。

## I. 大きな紙葉

A. ひとつの主題をめぐる、ひとつあるいはそれ以上の断章が書きつけられて

いるもの。

B さまざまな、相互に関連がない断章が書きつけてあるもの。

## II. 小さな紙片

A. ひとつの主題をめぐる断章が書かれているもの。

B. 二、三の関連のない断章が書きつけられてあるもの。

ところで、この大きい紙葉と小さい紙片の存在は何を示しているのか。Pascal の親族たちの証言によれば、Pascal は《小さな紙片》の上に彼の思想を書きつけたのだという。たとえば、Pascal の甥 (Pascal の姉 Gilberte の長男) である Etienne Périer は次のように述べている。

《Pascal が宗教に関する著作をする計画をもっていたことはよく知られていたので、彼の死後その問題に関して彼が書いたすべての文書を取り集めるのにひじょうな注意が払われた。それらはすべて一緒に、いくつもの綴り (liasses) にとじられて発見された。しかしそこには何の秩序も脈絡もなかった。というのも、私がすでに指摘した通り、それらは精神にうかぶがままに小さな紙片の上に (sur de petits morceaux de papiers) 書きつけられた彼の思想の最初の表現にすぎなかったからである。》<sup>(8)</sup> (傍点筆者)

Etienne Périer の妹、Marguerite Périer も次のように述べている。

《それが、彼 (Pascal) の死後見出された、ひとつひとつに文章の書きつけられた小紙片 (morceaux) なのです》<sup>(9)</sup>

そしてまた、《Pensées》刊行の準備をしていた Duc de Roannez や Etienne Périer の手助けをしていた、Brienne が、Gilberte Périer に宛てた手紙のなかにも、次のような表現が見られる。

《それら (Pensées) の断章を、彼 (Pascal)

の死後貧弱な小さな紙片に (sur de petits méchants morceaux de papiers) に書かれているのを見出したそのままに公刊するということ。》<sup>(10)</sup>

以上のような証言から、Pascal の死後発見された紙片の大部分が小紙片であったことは明らかであろう。Recueil Original に現在貼りつけられてある紙片も、その大多数が小紙片であるので、上記の証言が確証されるように思える。

しかし、Pascal は、本当に、彼の思想を《精神に浮かぶがままに、小さな紙片の上に》書きつけたのであろうか？

Recueil Original の紙片を、すこし詳しく見れば、この Etienne Périer の証言が事実と反していることが分かるのである。たとえば Recueil Original の 81 p. に貼りつけられてある小紙片 (L. 14—B. 338 の断章が書かれている) と、83 p. に貼られている小紙片 (L. 15—B. 410 の断章) を比べてみよう。Tourneur が指摘しているように、<sup>(11)</sup> この二つの紙片の切れ目が合致し、その上、両紙片上に書かれている線がぴったりと接合して一本の曲線になることから、この二つの断章はもともとは同一の紙葉の上に書かれ、次いで切りはなされたのだということが分かる。また、Pascal が、金銭出納用の大きな紙片 (papiers rayés) にいくつかの思想を書きつけ、後にそれを切り離して小紙片にしたことも、その紙に印刷されている縦横の線をつなぎ合わせることによって知られる事実である。<sup>(12)</sup>

こうみえてくると、Etienne Périer らの証言は、すくなくともひじょうに不正確なものであったことが理解される。Pascal は普通、大型の紙葉にいくつかの思想を書きつけ、後にそれらを切り離して小紙片にしたのである。Pascal の死後見出されたのは《小紙片》なのであるから、この切り取り (切り離し) 作

業は Pascal 自身の手によって生前行なわれていたことは疑えない。しかし、Pascal の作業はそれだけにとどまったのではない。Pascal は、小紙片（場合によっては大紙葉）をいくつかの綴り (liasses) にとじたのである。この点は、すでに引いた Etienne Périer の証言のなかにも、《それら〔紙片〕は、すべて一緒に、いくつもの綴りにとじられて見出された》という一節があることから推測されるのであるが、Recueil Original の紙片にまるいとじ穴が残っていることによっても明らかにそれと分かるのである。<sup>(13)</sup> こうみても、Pascal はその生前、大紙葉を小紙片に切断したのみならず、それらを分類して、紙片の綴りをいくつか作っていたのだと考えられる。このような面倒な作業を Pascal が行なったのは、いうまでもなく彼が執筆しようとしていた、《キリスト教弁証論》のおよその骨組をつくるためだったのであろう。とするならば、Pascal の死後彼の部屋から発見された時の、小紙片の状態が問題になる。その紙片群の一部はおそらくいくつかの《綴り》になっていたはずであり、その上、その《綴り》にはある順序が与えられていたかもしれない。この《綴り》の内容と順序が分かれば、Pascal が構想していた《キリスト教弁証論》の骨組が分かるということになる。

以上が Recueil Original から知ることができる事実である。

**Copie** すでに引用した Etienne Périer の Port-Royal 版への序文の中に、次のような注目すべき一節が含まれている。すなわち、Pascal の死後、紙片を発見してから《最初にわれわれが行なったことは、それをあるがままに、見出された時と同じ混乱のままに書き写させることであった》というのである。この一節はすでに Brunshvicg が注目したところであって、彼は次のように述べている。

《したがって、まずそれら〔紙片〕を書き写させることから始められたのだ。その Copie は、現在国立図書館にある、Manuscrit 9203 f. fr. であろうか？ その場合、この Copie は、自筆の原稿の順序を、「それがあつたがままに、見出された時の混乱のままに」再現しているのだろうか？ もしそうだとするならば、この Copie は、事実、第一のそして最も忠実な Pensées の édition ということになるだろう。〔……〕したがって、Pensées の公刊に関する研究は、まずこの Copie を調べることから始められねばならない》。<sup>(14)</sup> しかし、Brunshvicg の Copie 検討の結論は次の通りであった。《この Copie は、ある一時期に、Pascal の Pensées が与えられたかもしれない形態を再現している。しかし遺稿の最初の状態ではありえないように思われる。〔……〕この Copie は、最初の〔Pensées〕編纂者たちが企てた仕事の内部にわれわれを引き入れるものだ、というのが、この Copie についてわれわれの言いうる全てである》。<sup>(15)</sup> つまり Brunshvicg は、Copie 9203 (1 ère Copie) を、Port-Royal 版《Pensées》<sup>(16)</sup>の準備のためにつくられたものだとしなしたのである。そして、Etienne Périer が述べている最初の Copie は失なわれてしまっているのだと主張した。

しかし Brunshvicg 以後、とくに Louis Lafuma の研究によって、1 ère Copie が、Pascal の作成した《綴り》をそのままに再現していることがほぼ確実に証明されるにいたった。この点を述べるために、まず 1 ère Copie の体裁を簡単に見ることにしよう。

1 ère Copie は緑色の表紙の背中に、Copie des Pensées de Pascal と書かれている。<sup>(17)</sup> そして Copie の最初の頁に次のような目次が書かれている。<sup>(18)</sup>

この目次の中の、Opinion du peuple saines という標題は、copiste 自身の手によ

Ordre	A. P. R. Commencement
Vanité	Soumission et usage de la raison
Misère	Excellence Transition
Ennuy	La nature est corrompüe
( <i>Opinions du peuple saines</i> ) <sup>(19)</sup>	Fausseté des autres Religions
Raison des effects	Religion Aymable Fondement
Grandeur	Loy Figurative Rabinage
Contrariétez	Perpétuité Preures de Moyse
Divertissement	Preures de J. C. Prophéties
Philosophes	Figures
Le Souverain	Morale Chrestienne
Bien	Conclusion

て、横線で消去されて、その下に Raison des effects と書き直されている。これは写し誤りではなく、原文を忠実に筆写したものである。というのは、1 ère Cpoie の 189 頁に再び見出されるこの目次にも、同様の消去が見られるからである。

さて、1 ère Copie の 1 頁から 188 頁までには、上の目次の標題の下に、それぞれ最低 2 つから最高 40 までの断章が収められている。ただし、La nature est corrompüe という標題は、目次に存在するのみで、それに対応する断章は存在しない。つまり、La nature est corrompüe を除いた、28 の標題をもった断章群が、1 ère Copie の 1 頁から 188 頁には存在する。これらの断章群は、後に述べるように、Pascal の作成した《綴り》を再

現していると考えられるので、《標題つき綴り (liasses en titres)》と呼ばれている。

189 頁に再び現われる前記の目次の後、191 頁から 430 頁までは、断章が 30 の群に分かたれて書写されている。そして各断章群の間には白紙の頁がおかれている。ついで、431 頁には、大きく《Miracles》と書かれている。そしてそれに続く 435 頁から 472 頁までには、断章群が三つおかれている。

以上が、1 ère Copie のだいたいの体裁である。

さて、この Copie と Recueil Original の自筆草稿を照合させていくと奇妙な事実突き当たる。前に述べたように、Pascal が残した紙片は四種に大別できるのであるが、1 ère Copie 前半の《標題つき綴り》の部分に含まれている断章は、ただひとつの例外を除いて、I の A か II の B に属する (pp. 85-86 参照)。すなわち、いずれも同一主題についての断章が書かれている紙片と対応するのである。言い換えれば、おたがいに無関係な思想が雑多に書かれてある大、小の紙片は疑問を入れうる一つを除いて全て標題のついていない後半部の断章群に収められているのである。この事実は、1 ère Copie の標題つき断章群は、Pascal 自身が自らの手で紙片を切断して作成した綴りを再現していることを示しているのではないか。

上の事実に加えて、Pascal の自筆草稿の消去部分に注意すると、さらに興味ある事実が見出される。

たとえば、1 ère Copie の 5 頁から始まる、《Divertissement》という標題の下におかれている二つの断章 (L. 134-B. 168, B. 169-L. 133) が書かれている、自筆草稿を見よう。これは Recueil Original 121 頁に収められている小紙片であるが、この草稿を忠実に再現すると以下ようになる。括弧の中のイタリック体の部分は、Pascal 自身の手に

よって消去されている箇所である。

*(les hommes pour se rend)*

Divertissement

Les hommes n'ayant pu guérir la mort, la misère, l'ignorance, il se sont avisés, pour se rendre heureux, de n'y point penser.

—<sup>(20)</sup>

Nonobstant ces misères il veut être heureux et ne veut être qu'heureux, et ne peut ne vouloir pas l'être. Mais comment s'y prendra [-t-] il? Il faudrait pour bien faire qu'il se rendit immortel, mais ne le pouvant, il s'est avisé de s'empêcher d'y penser.

—

*(Il a quatre laquais)*<sup>(21)</sup>

—

*(Il demeure au-delà de l'eau.)*<sup>(21)</sup>

—

*(Si l'homme)*<sup>(21)</sup>

上の草稿で消去されている二つの断章、*Il a quatre laquais.*と*《Il demeure au-delà de l'eau.》*は、*《Divertissement》*というテーマのためには利用できないものとみなされて、Pascal 自身の手によって消去されたのである。ところが、この二断章は、1ère Copie の*《Vanité》*の標題の下に収められており、これに対応する小紙片も Recueil Originalに残っている。すなわち Pascal は、消去した二断章を、*《Vanité》*のテーマのために利用する意図の下に、再び他の紙片に書き写しておいたのである。

消去の例をもう一つ挙げておこう。有名な Descartes 批判の断章 L.84-B. 79 は、自然的無智の中にいる民衆の方が、生半可な知識をもつ人間よりも正しい判断を下している

と述べている断章 L. 83-B. 327 の裏面に書かれており、そして Pascal 自身の手によって消去されているのである。断章 L. 83-B. 327 は、1 ère Copie の*《Raison des effets》*の標題をもつ断章群の中に収められている。一見不条理に見える現実の諸状況の裏に、その状況を生み出している真の理由・原因を探るという*《Raison des effets》*のテーマと Descartes の自然学を批判する断章が無関係であることはいうまでもない。

このような消去の例は他にも見られるのである。

紙片の切断と断章の消去という二つの事実は、上のように考えてみると、Pascal が生前自らの手で草稿を分類し、*《綴り》*を作っていたということを証拠立てるもののように思われる。そして、1 ère Copie の前半部の標題つき断章群は、Pascal が作った*《綴り》*を再現していると考えられるための強力な証拠となるのではないか。

また、次のような事実にも注意を払う必要がある。

A. P. R. という標題の下に、1 ère Copie に筆写されている、*《A. P. R. Commencement……》*の書き出しをもつ断章 L.149—B. 430 は、Copie 69 頁から 75 頁にわたっているが、次のように途切れている。*《……Il a voulu se rendre parfaitement connaissable à ceux-là, et ainsi voulant paraître à découvert à ceux qui le cherche de tout cœur, il a tempéré.》*そして、copiste は、75 頁の欄外に次のように註記している。*《Cette suite s'est trouvé dans le chap. Fondement de la Religion.》*。まさしく、上の断章の終りの数行は、1 ère Copie 121 頁、*《Fondements de la Religion Chrétienne》*の標題つき断章群の中に、L. 241—B. 765 と L. 242—B. 585 との二断章の間にはさまれて書写されている。この最後の部

分は、四枚目の草稿に書かれているのである。つまり copiste は、発見された《綴り》を全くそのままの形で書写しようとしたために、Pascal が《綴り》を作る際誤ってとじた紙片の位置までにも忠実に従っているのである。

**標題目次** 以上のような Lafuma の所論は、《綴り》が存在していたこと、ならびに《綴り》のおのおのを、1 ère Copie が忠実に再現していること、この二点をほとんど完璧に証明している。しかし Pascal の死後見出された《綴り》が、1 ère Copie が再現しているように《Ordre》から《Conclusion》にいたるまで、明確な順序をつけられていたかどうかという点になると疑問を差しはさむ余地がないでもない。Pascal は単にいくつかの《綴り》を作成しただけで、それに順序を与えてはおかなかったのを、彼の死後、親族友人の一人（たとえば Duc de Roannez,あるいは、Arnauld,あるいは Nicole,あるいは Etienne Périer）が適当に配列したのではないかと考えることができるからである。

このような疑問に対しては、《目次》の存在を答えるにもち出すことができるであろう。1 ère Copie の冒頭におかれている、標題目次（前掲）が Pascal 自身の手になるものだとすれば、《綴り》の配列が Pascal によってなされたということに疑いを差しはさむことができなくなる。事実 Lafuma は最終的にはそのように主張した。この目次の Original は存在しないが、Lafuma は次のような二つの事実に注目したのである。

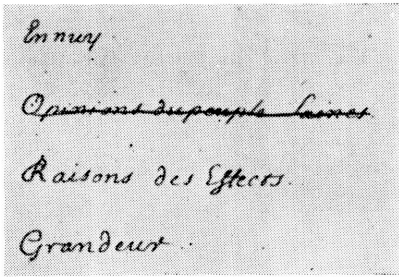
第一は、《Opinions du peuple saines》という標題が、消去のための横線をその上に引かれたまま再現されているという点である。その下に書かれている《Raison des effets》が、じつは、《Opinions du peuple saines》の訂正であるということはこの標題の断章群を点検すると簡単に理解される。つまり copiste

は、《目次の》Original の消去部分をも忠実に再現したのであり、これは、Original が重要なもの——すなわち Pascal の手になるものだという証明になると Lafuma は考えるのである。第二に Lafuma が注目する点は、《La nature est corrompüe》という標題が目次の中にあることである。奇妙なことに、この標題は目次の中にあるだけで、この標題に対応する断章群は、Copie に書写されていない。ということは、この目次全体が、すでに存在している《綴り》をもとにしてつくられたのではないことを示している。すなわち Pascal はまず目次を作成し、ついでそれに従って草稿の《綴り》を作っていたが、その作業は中断され、《La nature est corrompüe》の標題の下にはついにひとつの断章も分類されなかった。これが Lafuma の主張である。

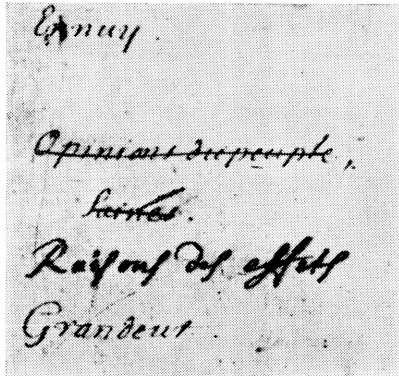
1 ère Copie と 2 ème Copie ところで、目次に関する Lafuma の主張に対して強力な反論を立てうる根拠となる事実がひとつある。この事実は、現在までのところ、Pascal 研究者によって一度も指摘されていないので、ここに書いておくことにする。

問題の標題目次は、《Pensées》のもうひとつの Copie (Copie. B. N. f. fr. 12449. 通称 2 ème Copie) の冒頭にもおかれている。ところが、この 2 ème Copie の標題目次においては、copiste は《Opinions du peuple saines》を、消去のための横線なしに、正しい標題として書いたのである。したがって《Opinions du peuple saines》の次の標題は、《Grandeur》となっている。ところが copiste 以外の人間の筆跡によって、《Opinions du peuple saines》の上に横線がひかれ、その下に《Raisons des effets》と訂正されているのである。(写真(1), (2) 参照)

この 2 ème Copie の標題目次と 1 ère



(1) 1 ème Copie



(2) 2 ème Copie

Copie の 標題目次を比較して、ごく素直に考えてみるならば、結論は次のようになるであろう。すなわち 1 ère Copie の 標題目次は、2 ème Copie の 標題目次を、訂正部分をも含めて、忠実に筆写したものである、と。もちろん、2 ème Copie の 標題目次が、Pascal の Original を筆写したものだという可能性はある。しかしその場合でも、《Raison des effets》の 標題が Pascal 自身のものではないことは明白であろう。

このようにして、標題目次の問題を検討すると、2 ème Copie という、従来ほとんどかえりみられなかった《Pensées》のもうひとつの写本の存在が浮かび上がってくる。1 ère Copie と 2 ème Copie は、どのような関係にあるのだろうか？ この問題は現在までのところ、全く研究されていない。

以上のような記述によって、《Pensées》の

二つの写本が、いろいろと興味ある事実を含んでいることが理解されるであろうが、この両写本については、次のような作業を中心に、徹底的な研究がなされる必要があると考えられる。

第一に、Recueil Original の草稿と二つの写本の断章テキストとの照合。第二に二つの写本の断章テキストの照合。第三に二つの写本と Port-Royal 版との比較である。

「賭」の断章 そのような作業の一例として、《Pensées》の中でも最も高名な断章のひとつ、L. 418-B. 233 (いわゆる「賭」の断章) を調べてみることにしよう。

この断章は、Recueil Original の 4 頁と 8 頁とに貼られている、24×19 cm と 23.5×20.5 cm の二枚の紙の表と裏にわたってほとんど余白を残さず書きこまれている。Copies においては、標題つき断章群、すなわち《標題つき綴り》の後に続く第二番目の断章群に属している。1 ère Copie では、201 頁から 208 頁まで、2 ème Copie では 413 頁から 418 頁までに書写されている。またこの断章は、Port-Royal 版では第七章《Qu'il est plus avantageux de croire que de ne pas croire ce qu'enseigne la Religion Chrétienne》に収められているが、この章にはとくに次のような《前書き Avis》が附されている。(これは「賭」の断章について今までなされた無数の注解の第一番目のものであるから、ここに全文を引いておこう。)

《Presque tout ce qui est contenu dans ce chapitre ne regarde que certaines sortes de personnes qui n'étant pas convaincues des preuves de la Religion, et encore moins des raisons des Athées, demeurent en un état de suspension entre la foi et l'infidélité. L'auteur

prétend seulement leur montrer par leurs propres principes, et par les simples lumières de la raison, qu'ils doivent juger qu'il leur est avantageux de croire, et que ce serait le parti qu'ils devraient prendre, si ce choix dépendait de leur volonté. D'où il s'ensuit qu'au moins en attendant qu'ils aient trouvé

la lumière nécessaire pour se convaincre de la vérité, ils doivent faire tout ce qui les y peut disposer, et se dégager de tous les empêchements qui les détournent de cette foi, qui sont principalement les passions et les vains amusements.》<sup>(22)</sup>

さて、この「賭」の断章は、《Pensées》の

## (I)

1 ère Copie (p. 201)	2 ème Copie (p. 404)
<p style="text-align: center;"><i>dis</i></p> <p>Il n'y a pas si grande <math>\wedge</math> proportion+ entre nostre Justice &amp; celle de Dieu (qu')+ entre l'unité &amp; l'Infiny <i>qu'+</i></p>	<p>Il n'y a pas si grande disproportion entre l'unité &amp; l'Infiny qu'entre nostre Justice &amp; celle de Dieu.</p>
<p style="text-align: center;">Port-Royal (éd. Flammarion. p. 100)</p>	<p style="text-align: center;">Recueil Original (p. 3)</p>
<p>Il n'y a pas si grande disproportion entre l'unité et l'infini, qu'entre nostre justice et celle de Dieu.</p>	<p>Il n'y a pas si grande disproportion entre nostre Justice et celle de dieu qu'entre l'unité et l'infiny.</p>

## (II)

1 ère Copie	2 ème Copie
<p style="text-align: center;"><i>choisir</i></p> <p>Ouy mais il faut (<i>parier</i>) cela n'est pas volontaire vous estes (<i>embarqué</i>) <sup>(23)</sup> lequel (<i>choisissez</i>) vous donc, (voyons puisqu'il faut choisir), voyons ce qui vous intéresse le moins, vous avés deux choses à perdre le vray &amp; le bien &amp; deux choses à engager vostre raison &amp; vostre volonté, vostre connaissance &amp; vostre beatitude, &amp; vostre nature a deux choses à fuir l'Erreur &amp; la misère, vostre raison n'est pas plus blessé (en</p>	<p>Ouy mais il faut parier cela n'est pas volontaire vous estes embarqué lequel prendrez vous donc; Voyons puisqu'il faut choisir, voyons ce qui vous intéresse le moins, vous avés deux choses à perdre le vray &amp; le bien &amp; deux choses à engager vostre raison &amp; vre volonté vostre connaissance &amp; vostre beatitude; Et vostre nature a deux choses à fuir l'Erreur &amp; la misere, vostre raison n'est pas plus blessée puisqu'il faut</p>



choisissant l'un que l'autre) puisqu'il  
*en choisissant*  
 faut, necessairement choisir<sup>^</sup>, voilà un  
*l'un que l'autre*  
 point vidé mais votre beatitude?

Pesons le gain & la perte en prenant  
*le parti de croire*  
 (croix que dieu est) Estimons ces deux  
 cas si vous gagnez vous gagnez tout,  
 si vous perdez vous ne perdez rien,  
*croyez donc si vous le pouvez*  
 (gagez donc qu'i est sans hésiter), cela  
*croire*  
 est admirable ouy il faut (gager) mais  
*je hazarde*  
 (je gage) peut estre trop.

PORT-Royal

(Ed. Flammarion. pp. 101~102)

Oui, mais il faut parier; cela n'est pas  
 volontaire; vous êtes embarqué; et ne  
 pariez point que Dieu est, c'est parier  
 qu'il n'est pas. Lequel prendrez-vous  
 donc? Pesons le gain et la perte en  
 prenant le parti de croire que Dieu  
 est. Si vous gagnez, vous gagnez tout;  
 si vous perdez, vous ne perdez rien.  
 Pariez donc qu'il est sans hésiter. Oui,  
 il faut gager. Mais je gage peut-être  
 trop.

nécessairement choisir en choisissant  
 l'un que l'autre, voilà un point vidé,  
 mais vre béatitude? Pesons le gain &  
 la perte en prenant croix que Dieu  
 est, Estimons ces deux cas si vous  
 gagnez vous gagnez tout, si vous perd-  
 ez vous ne perdez rien, gagez donc  
 qu'il est sans hésiter, cela est admir-  
 able Ouy il faut gager, mais je gage  
 peut estre trop.

Recueil Original (p. 4)

Ouy mais il faut parier. cela n'est pas  
 volontaire, vous estes embarqué lequel  
 prendrez vous donc. Voyons. puisqu'il  
 faut choisir voyons ce qui vous inté-  
 resse le moins. Vous avez deux choses à  
 perdre, le vray et le bien et 2 choses à  
 engager, vostre raison et vostre volonte,  
 vostre connaissance et vostre béatitude,  
 et vostre nature a deux choses à fuir  
 l'erreur et la misere. Vostre raison n'est  
 pas plus blessée, puisqu'il faut nécessai-  
 rement choisir, en choisissant l'un  
 que l'autre. Voilà un point vidé. Mais  
 vostre béatitude? Pesons le gain et la  
 perte en prenant croix que Dieu est  
 estimons ces deux cas. Si vous gagnez  
 vous gagnez tout, si vous perdez vous  
 ne perdez Rien. Gagez donc qu'il est  
 sans hésiter. Cela est admirable. Ouy  
 il faut gager mais je gage peut estre  
 trop.

中でも最も長いもののひとつであるから、テ  
 キスト全てをここに掲げることはできないの  
 で、テキスト異同(とくに 1 ère Copie と

2 ème Copie の間での異同)の面からみて  
 興味ある部分だけを照合してみることにする。  
 括弧内は横線で消去された部分、イタリック

は訂正付加の部分である。

表1の照合によって、すくなくともこの部分に関しては、2<sup>ème</sup> Copie, Port-Royal版がともに1<sup>ère</sup> Copieによっていることが明白になる。1<sup>ère</sup> Copieの訂正箇所(proportion → disproportion)はcopisteの筆跡によって行なわれているが、《nostre Justice et celle de Dieu》と《l'unité et l'Infiny》の両項の位置の入れ換えの指示(イタリック体と十字)は、copisteとは別人の筆跡である。Recueil Originalを見れば、この指示が草稿とは合致しない——すなわちcopisteが正しく草稿通りに書写したものをわざわざ異なった文に書き変えさせているのである。ところが、2<sup>ème</sup> CopieもPort-Royal版も、この原文とは合致しない指示に従っている。

表2の照合はますます複雑な様相を呈する。1<sup>ère</sup> Copieの訂正のうち、(au Caraquan → embarqué)ならびに《en choisissant l'un que l'autre》はcopisteの筆跡であり、草稿原文と合致した訂正である。その他の訂正はすべて原文と相反した訂正(すなわち消去された部分が全て原文に一致している)であり、copiste以外の第三者の筆跡——表1で原文と相反する指示をした筆跡——によって行なわれている。2<sup>ème</sup> Copieは、copisteの筆によって行なわれた原文と合致する訂正には従っているが、それ以外の訂正は受け入れていない。Port-Royal版は、(au Caraquan → embarqué)という訂正を受け入れると同時に、(en prenant croix que Dieu est → en prenant le parti de croire)という原文とは相反した訂正にも従っている。

**暫定的結論** 標題つき目次については、前に記したように、1<sup>ère</sup> Copieは2<sup>ème</sup> copieに従って——すなわち時間的には後に書写されたと考えられるが、その他の断章テキストに関しては、今述べてきた「賭」の断章の場

合から考えられることが、ほぼ一般的に言うようである。すなわち、

1°. 2<sup>ème</sup> CopieとPort-Royal版は全く無関係である。Port-Royal版作成に2<sup>ème</sup> Copieが参照された形跡はない。

2°. 1<sup>ère</sup> Copieには、すくなくとも二回訂正が加えられた。その第一回目は2<sup>ème</sup> Copie作成前であり、copiste自身の筆跡により、その第二回目は2<sup>ème</sup> Copie作成前あるいは後でありcopiste以外の人間の筆によるものである。

1<sup>ère</sup> Copieの第二回目の訂正は、草稿原文に合致させるための訂正ではなく、おそらくPort-Royal版編纂の際に文意・言辞をととのえようとして行なわれたと推測できよう。

この暫定的結論のうち、2°はLafuma説とは異なる。すなわちLafumaは、2<sup>ème</sup> Copieが1<sup>ère</sup> Copieより前に書き写されたと考えているからである。しかし、「賭」の断章についての二つの写本の照合が明らかに示すように、2<sup>ème</sup> Copieは1<sup>ère</sup> Copieの訂正を、それが草稿原文と一致している場合には受け入れているのであるから、時間的には1<sup>ère</sup> Copieが先に作られ、2<sup>ème</sup> Copieがそれを参照したとみる方が妥当であろう。

## 注

(1) B. Pascal. Pensées. Ed. critique. par Zacharie Tourneur. 2 vol. Ed. de Cluny. 1938. Préface.

(2) ibid.

(3) B. Pascal. Discours de la condition de l'homme. par P.-L. Couchoud. Albin Michel. 1948. Introduction.

(4) Louis Lafumaの研究は次の著作

にまとめられている。

Recherches pascaliennes. Ed. de Luxembourg. 1949.

Controverses pascaliennes. Ed. de Luxembourg, 1952.

Histoire des Pensées de Pascal. Ed. de Luxembourg, 1954.

Papiers morts, étincelles vivants (*In* Bulletin de la Société des Amis de Port Royal. n° 89.) 1957.

La Copie 9203 (*In* Ecrits sur Pascal. Ed. du Luxembourg. 1959)

Les manuscrits des Pensées: ce qu'ils nous apprennent. (*In* Cahiers de Royanmont. N° 1. Pascal. l'homme et l'œuvre. Ed. de Minuit.)

なお、Louis Lafuma 氏は、いわゆる Universitaire ではなく、その経歴はあまり知られていないので、ここで簡単に紹介しておきたいと思う。

Louis Lafuma (1890—1964) は、Isère 県の出身である。彼の家系は有名な製紙業者であり、従自身 Navarre 製紙会社に勤務し、とくに《すかし filigranes》を多く巧案した。1940 年第二次世界大戦によって商業活動が不可能となり、Lafuma 氏は 17 世紀文学の研究に没頭することになった。最初は、17 世紀初頭の humaniste chrétien である Jean-Pierre Camus の研究を行っていたが、次いで《Pensées》の草稿の研究に移り、《Pensées》の Copies の重要性を立証することに成功し、1951 年には、画期的な《Pensées》三冊本を出した。これが、B. Pascal. Pensées sur la Religion et sur quelques autres sujets. Introduction de L. Lafuma. 3 vol. Textes. Notes. Documents. Ed. du Luxembourg. である。現在これが、1 ère Copie に準拠した《Pensées》の最良の

édition となっている。

(5) Etienne Périer: Préface de l'éd. de Port Royal. Œuvres de B. Pascal. Les grands Ecrivains de France (以後、G. E. と略す) T. XII., p. cxc.

(6) 上記(註4)の Lafuma の著作参照。とくに La Copie 9203 に要領よくまとめられている。

(7) Original des Pensées de Pascal: fac-similé du manuscrit 9202 (fonds français) de la Bibliothèque Nationale. Texte imprimé en regard et notes, par Léon Brunschvicg, Hachette. 1905.

(8) art. cit.

(9) G. E. T. I. p. 134

(10) G. E. T. XII, p. CXLVII.

(11) Pensées. Ed. Paléographique. par Z. Tourneur. Vrin. 1942. p. 169, n. 1.

(12) Controverses pascaliennes p. 48

(13) このとじ穴については、P. L. Couchond. op. cit. に詳しい説明と写真がある。

(14) G. E. T. XII, pp. IV-V.

(15) ibid.

(16) Pensées de M. Pascal sur la Religion et sur quelques autres sujets, qui ont été trouvées après sa mort parmi ses papiers. Paris, Guillaume Desprez. (MDCLXIX) MDCLXXX.

(17) Pensées. Ed. Cluny. p. XVII.

(18) 以下の 1 ère Copie, 2 ème Copie に関する記述は、いずれも Microfilm の写真版による。

(19) 横線で消されている。

(20) この横線は、断章と断章の間によく見られる。Pascal の書癖である。

(21) 横線で消されている。

(22) Ed. Flammarion. p. 99.

(23) caraquan=caracan.